
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 36 2015.03

ボランティア講座

北方民族に魅せられて ～館長講演を拝聴して～ 菅原 みえ子 -----	1
博物館訪問	
札幌市公文書館を訪れて 沼田 勇美 -----	2
重要文化財・北海道庁旧本庁舎 通称「赤れんが庁舎」を見学しました 星野 フサ -----	3
活動報告	
北海道に帰ってきました -沼田町化石館について- 田中 嘉寛 -----	4
横田 誠三さんによるポプラチェンバロ メンテナンス 小野 敏史 -----	5
グループ紹介	
平成遠友夜学校の紹介 太田 晶 -----	6
お知らせ	
北海道大学総合博物館ボランティアの皆さま 在田 一則 -----	8
展示公開一時休止 成田 佳子 -----	8

ボランティア講座

北方民族に魅せられて ～館長講演を拝聴して～

菅原 みえ子 (岩見沢市)

バレンタインデーの2月14日、北大総合博物館での公開ボランティア講座に参加しました。

津曲敏郎館長が退任を前に、支えて下さっているたくさんの方々のボランティアの方々への感謝を込めて「北方民族の世界・常設展開設に向けて」のお話をなさいました。主に映像を中心にウデヘやナーナイの北方民族の暮らしや民話、世界観等をわかりやすく解説して下さい充実した90分間でした。

特に「ウィルタと北斗七星」の話では「金持ちには星が8つ見える。アルコールという二重星がよく見えるのだ。だから金持ちとは即ち狼の腕のいい人の事である」に納得。更にアルセーニエフ作黒沢明映画化でも知られるデルス・ウザーラはゴリド(ナーナイ)という事になっているが実はウデヘだったのではないかと。それは星という言葉の呼び方に関わるということも興味深かった。

民話では日本に伝わる昔話との類似性にも触れ、今ナーナイの民話をテキストに再話の学習をしている私はメモをとる手に思わず力が入りました。

11年前、北海道文学館で「ビキン川のほとりで・

沿海州ウデヘ人の少年時代」の発刊にまつわる話を津曲先生から伺い本も買い求めました。

更に昨秋には夫と共にウデヘ族の住むクラスヌイヤール村への旅が実現しました。津曲先生という研究者のご同行も得て旅はグレードアップ。それは幸せなことでした。

あの新鮮な驚きの9日間がこの日くっきり甦ります。「ビキン川のほとりで」の著者カンチュガさんを訪問した時の明るい笑い声も聞こえそうです。ウデヘの村へ行った事からナーナイ族、ウィルタ族、チュクチ族、シャーマニズムへと私の世界はどんどん広がっていきます。

網走の道立民族博物館へも又訪れ、更なる学習を深めようと春の旅を計画中です。

来年夏の博物館リニューアル・オープンでの「アイヌ・北方民族文化」常設展を首を長くして待ち望んでいます。そして津曲先生のこの常設展への熱い思いを再び聴く事が出来れば。

その時は必ずや岩見沢から飛んで行くでしょう。

札幌市公文書館を訪れて

図書ボランティア 沼田 勇美

札幌市立豊水小学校

札幌市公文書館は、旧豊水小学校跡地にある。札幌の古い小学校。中央創成・西創成・大通り・苗穂などと一緒に消えてしまった由緒ある小学校の一角。札幌市中心部の住宅はドーナツ化現象により郊外に移った。それに伴って中心部から子供たちが消え、小学校も消えてしまった。

札幌市公文書館

平成 26 年 12 月 6 日(土)午後 1 時過ぎに中央区南 8 条西 2 丁目にある「札幌市公文書館」に、北大総合博物館ボランティアの人たちが集まった。総勢 9 名。公文書館・榎本洋介主事から説明していただいた。

公文書館は、平成 13 年 7 月に開館したばかりと言う。公文書は 1899(明治 32)年頃から収集していてデジタル化の作業をしている。公文書は札幌市の事業計画書・政策に関わる書類などとのこと。

最初に 2 階の常設展示室から説明をうけた。中でも中島公園付近の古い写真が目を引いた。今の中島公園の様相とは異なり、料亭などが昔はあった様です。つづいて 2 階の閲覧室に行き、デジタル化した資料をパソコンで見ること、また保存資料の閲覧も、ここで可能とのこと。

2 階の廊下壁には 2 メートル四方大の札幌市航



空写真が貼ってあった。昭和 22 年撮影そして昭和 40 年撮影のもの。昭和 22 年の写真には北 24 条以北にあった「札幌飛行場」が写っていた。

次に 1 階の書庫を見学した。書棚は北大図書館と同じようだが、火災対策が取られていた。火災時には、職員の避難が優先され次に窒素ガスが室内に充満されて消火されるようになっていた。1 階を重量物の書庫にしたのは、豊水小学校の 2 階、3 階建物が耐震強度対策が弱いためだと言う。北大博物館で聞いた話と似ていた。

その他、旧琴似村・旧円山村・旧白石村などからの公文書も、保存されているとのこと。



札幌市公文書館(旧豊水小学校)



展示解説風景

重要文化財・北海道庁旧本庁舎 通称「赤れんが庁舎」を見学しました

図書・植物ボランティア 星野 フサ

2月21日（土）午後1時、9名の参加者は2階観光情報コーナーの緑色ジャンパーの人の所に集合しました。

雪祭りは終わったはずなのに随分お客さんが多くて人をかき分ける感じで驚きました。

階段の幅はこんなに広がったかなあなど、以前に2回くらいひとりで来た事があったのに、初めてやって来たみたいなお新鮮さを感じました。加齢で足が重くなって段差のある32段がきつかったのかもしれない。

事務局長の沼田勇美さんが前もって案内をお願いしてくれていた観光ボランティアガイドの遠山さんと伊藤さんの案内は素晴らしい内容でした。その内容の一部に私見を少し入れて記してみたいと思います。

1888（明治21）年12月にできたこの北海道庁本庁舎は豊平村（現札幌市豊平区）で製造されたレンガ約250万個が使われているそうです。1909（明治42）年1月の火災によって内部と屋根が焼失し、外壁のレンガだけが残りました。1911（明治44）年にそのレンガを使って元の姿に近い形で修復されて、長年「赤れんが」の愛称で道民に親しまれてきました。印象に残りましたのは、「1910（明治43）年6月起工、北海道庁舎煉化三層造、工事主任者名前、工事現場監督者名前、土木技手名前、傭名前」が並記された大きな板が壁に立てかけられていたことです。こうして、北海道の礎が作られたのだなと感動致しました。

1968（昭和43）年には北海道百年記念として八角形の赤れんが塔を載せた創建当時の姿に復元され現在に至っています。札幌のシンボルとも言える、どちらから見ても形が似ている赤れんが塔に対する見方がすっかり変わってしまいました。

展示されている20点の絵画は本道出身のプロの画家に委嘱して描かれたもので、北海道開拓の史実を伝えているそうです。クラーク先生をしたって見送る学生の姿が印象に残りました。1859（安

政6）年、松浦武四郎作「東西蝦夷山川地理取調図」にぎっしり書き込まれた地名の多さも驚きでした。1845（弘化2）年から1858（安政5）年にかけて、アイヌの人たちの協力を得て樺太、千島を含め北海道内の6回の調査を単身で行い、内陸の地形の詳細を明らかにしたそうです。

北海道庁官室の壁板は「たまもく」といわれ、ヤチダモの根を加工したものだそうです。壁板もひとりで来ていた時は表面の微妙なカーブや色合いを見落としていました。北方領土の展示も分かり易かったです。

なお、重要文化財指定は1969（昭和44）年のことで、ここは北海道の歴史に関する古い文書や記録など収集・整理・保存し、閲覧できる北海道立文書館(<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/mnj/>)でもあります。

案内していただくと「内容がすばらしくなるよね」と参加された皆様は見学会に感謝していました。ありがとうございました。赤れんが庁舎の入口階段で記念の撮影をしました。



赤れんが庁舎入口階段で記念撮影
筆者は前列左端

活動報告

北海道に帰ってきました ー沼田町化石館についてー

化石・展示解説ボランティア 田中 嘉寛

2015年4月から、北海道沼田町化石館の学芸員になる田中嘉寛です。2009年に北海道大学総合博物館を離れてから、福井市自然史博物館勤務、ニュージーランドのオタゴ大学で博士課程を経て（写真1）、あっという間に6年経ってしまいました。再び北海道に帰ることができ嬉しいです。この喜びを北大博物館ボランティアの皆さんにお知らせしたくなりました。

これから、いままで学んだ博物館学と古生物学を活かして、化石研究を促進させ、より面白い教育普及活動を行っていきます。また、各地の博物館や博物館ボランティアの皆さんと情報交換をしながら、博物館活動を充実させていきたいと思っています。

さて、沼田町化石館の展示室（化石体験館）は北大博物館に負けず素晴らしい博物館です。化石分野に特化しており、イルカ・クジラ・セイウチ・カイギュウなど水生哺乳類の骨格を数多く展示しています（写真2）。特に、全身がまともに見つかった素晴らしい保存状態のヌマタネズミイルカが目玉展示です（写真3）。他にも爬虫類のクビナガリュウもあり、特にお子さんに人気があります。

骨だけでなく、アーティストの徳川広和氏による沼田産哺乳類化石の復元模型（10分の1から25分の1サイズ）の展示も人気です。細部まで作り込まれた模型は見ていて飽きません。

化石体験館はその名の通り、体験型学習も充実しています。化石発掘体験や、化石クリーニングも子供から大人まで楽しめます。夏休みには著名な研究者を招いた講演会も催されてきました。化石の面白さを知るには、最適の場所です。

札幌からそう遠くありません。沼田町は札幌から120kmで、鉄道では90分程度です。素晴らしいのは博物館だけでなく、食べ物も美味しいところで（ソバと米が素晴らしい...）、夏はあんどん祭りや蛍などで賑わいます。是非、遊びにいらしてください。皆さんを熱烈歓迎いたします！

情報；沼田町化石館は冬季休館します。2015年の開館は4月29日から11月までです。詳しくは0164-35-1034（電話）か「沼田町化石館」で検索してください。



写真1 指導教官 R. Ewan Fordyce 教授（左）と著者（右）。博士論文提出。（Photo: Cheng-Hsiu Tsai）



写真2 展示室の様子。左からクジラ、クビナガリュウ、カイギュウ（写真：篠原暁館長提供）



写真3 ヌマタネズミイルカの骨格（写真：篠原暁館長提供）

横田 誠三さんによるポプラチェンバロ メンテナンス

ポプラチェンバロボランティア 小野 敏史

昨年12月7日と8日、ポプラチェンバロの製作者である横田誠三さんが約2年振りに来札、博物館にてメンテナンスと講演会をして下さいました。

初日はジャック（撥弦機構）と鍵盤を外しての掃除に始まり、鍵盤の状態の確認後、ヴォイシング（整音）に重点を置いて調整して下さいました。ヴォイシングとは、音色を整えることで、チェンバロの場合、弦をはじくプレクトラム（爪）を削ったり、引っ掛かり具合を調整します。横田さんは、製作者としては豊かに良く響く音にしたいが、プレクトラムが引っ掛かり過ぎると演奏者が弾きにくくなるので、その間の微妙なところを探りながら調整しているとおっしゃっていました。

また、鍵盤楽器の中でもチェンバロ特有のスタガリングの調整もして下さいました。これは、複数のレジスターを同時に加音した際、加音された複数のプレクトラムの撥弦が全て一致してしまうと、タッチが重くなってしまふ為、わずかに時差を付けて撥弦時をずらすことを指します。このスタガリングの調整をしっかりとすることで、とても弾き易くなるそうです。作業しながらの横田さんの話は、技術者の私にとって非常に興味深いことばかりでした。

二日目は、昨日の調整の続きの後、チェンバロボランティアの新妻美紀さんによるオープニング、スコットランド民謡“ロッコ・ローモンド”の演奏で始まり、『北大ポプラチェンバロ、ポプラ並木倒木から10年』と題し、ポプラチェンバロに関する講演会をして下さいました。

北大のポプラは、良い音の条件である強さと軽さのバランスが理想的で、楽器に適した木材であったこと、また複数に枝を伸ばした凹凸のある丸太から2mを超える無垢な板を細心の挽き割り作業によって奇跡的に2台分も取ることが出来たこと、それによって10年前の台風で倒れたポプラたちがチェンバロとして蘇ったという話は、非常に感慨深いものでした。



講演中の横田誠三さん

最後はチェンバロボランティアの雪田理菜子さんによるバッハの“パルティータ 2番からカプリッチオ”の演奏で締めくくられ、観客の方も聴き入っていました。

温度・湿度のチェックをして下さっている方々のおかげでチェンバロが落ち着いてきたと、横田さんも感謝の言葉を述べられておりました。

これからもポプラチェンバロを大切に維持していきたいと思います。



新妻美紀さん提供のチェンバロ楽譜

グループ紹介

平成遠友夜学校の紹介

平成遠友夜学校教頭 太田 晶

平成遠友夜学校は、札幌農学校卒業生で後に同校で教鞭をとられた新渡戸稲造が、学びたくても学資がないという人々のために創設した「遠友夜学校」の精神を受継いだ、生涯学習と教養を深める場、大学と市民との交流の場です。北大の学生や教員の方に講師を依頼し、毎週火曜日の18:30から北18条の遠友学舎において講義を開いています。2005年に平成遠友夜学校をスタートした校長である藤田正一名誉教授のもとで、私たち学生ボランティアは教頭として、生徒の市民の皆さんのお力をお借りしながら夜学校を運営しております。

当時の遠友夜学校では北大生が教師として無償で授業をしたことから、受講料は無料、講師の方にも無償のボランティアとして講義を依頼しております。質疑応答や講義後の茶話会を通じた市民との交流は普段の大学生活では中々経験できず、市民にとってだけでなく講師やボランティアの学生にとっても学びの場となっています。

平成遠友夜学校はこの4月から11周年目に突入します。この節目に、これから博物館ニュースの誌面で私たちの活動や講義の内容を紹介させていただけることになりました。今後共よろしく願います。

さて、今回は1月27日の講義「旅と青春と未来」について、平成遠友夜学校の生徒である高橋 備さんからお寄せ頂いた感想文をあわせて紹介いたします。この回の講師は平成遠友夜学校教頭も務める文学部4年生の廣田俊樹教頭です。旅が大好きで長期の休みを利用してアジア各国に何度も足を運んでおり、道中の出来事やその旅を通して得たこと、感じたことを夜学校で何度も講義していただきました。この講義では大学4年間で積み重ねた旅の中で形作られていった廣田教頭の人生観・価値観についてお話ししていただきました。

廣田教頭は旅の中で人生観や価値観を変容させ、自分なりの生き方を見出しました。大学生という



遠友学舎

自由な時間を、とても有意義に使われたのではないかと思います。また教頭の好きな歌の歌詞に「行き先なんか知らん 騙されて乗り込んでいくんだ」という一節があるそうですが、未知らぬ物事に恐れず飛び込んでいく気持ちを私も持つことができればと思います。

平成遠友夜学校は毎週火曜日18:30から講義を開いております。講義に参加される生徒の方々、講義を引き受けてくださる北大の学生・教員の方々、運営に参加して下さる学生ボランティアはいつでも歓迎しております。また講義予定に関してはHPやFacebookでご覧いただけます。ぜひ一度、講義を聴きにいらしてください。遠友学舎でお待ちしております。



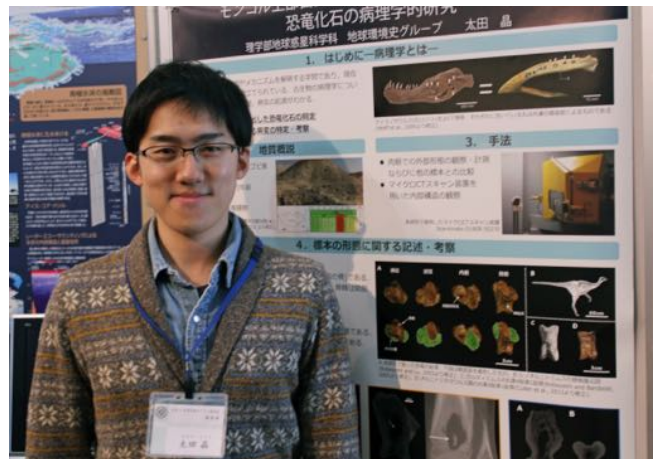
講演中の廣田俊樹教頭

以下に廣田教頭の講義「旅と青春と未来」についての平成遠友夜学校生徒の高橋さんの感想文を掲載いたします。

廣田俊樹先生の講義は今回で私は2回目です。前は昨年9月16日「中東紀行」と題してヨルダンまでの旅を人と人との出会いにおけるほのぼのとした心模様を織り交ぜて楽しく聞かせて頂きました。廣田先生は又今年の3月には中東の旅を計画され、今回はアラビア半島の最南端イエメンの旅を計画されておりました。しかし情勢不安定でクーデターが発生した為、止む無く隣国のオマーンに変更を余儀なくされることになったそうです。廣田先生にとって旅は自分を成長させてくれた、又自分を変えてくれた、自分を確立させてくれた何よりも代えがたい大切な物の様です。今回の講義内容は廣田先生の旅を通してのデリケートな心の変遷、人生観、生き方の変化等を、①過去、②演じない人生、③死んでも良いという心持、④本来の意味での旅、⑤将来のこと、以上の5項目に分けられ、私達にも分かりやすく快く講義して頂きました。廣田先生は東京のご出身で小中高学校を東京で順風満帆に学生生活を過ごされ、北海道に住みたいとの思いも叶って北大に入学、すべてが順調に運ぶかに思えましたが大学1年の時に歯車が狂い喪失感に陥ってしまったそうです。1年の留年よりも、むしろ心に傷を負ってしまった自分を認めたくなく大層苦しんだそうですが、ある時、自分自身をさらけ出し、周囲に極度に気を配らず、自分をさらけ出して演じないように、自分の好きなように暮らそうという境地に至った瞬間、自分の自然の生き方が理解できるようになったとの事です。そのヒントを与えてくれたのがどうも「旅」というものらしいのです。廣田先生は大きくなったらやりたいことが3つほどあったとの事で1つは北海道で暮らす事、2つ目は好きな人を作って恋愛をしたい事、3つ目は華やかな青春を謳歌したい事、今現在この3つとも叶い、自分だけの事を考えると死んでもいい境地になれるそうです。中東の旅の中でも死を身近に感じたことが何度かあり、死というものが生命の流れの一環として有り、とても自然なものとして自分に受け入

れられることが出来たそうです。死を意識することによって生きている事を実感する、そんな旅をこれまで経験され、これからも何の後ろ盾もない自分だけの力で旅をする事によって自分自身をより豊かにしていきたいという熱い思いが廣田先生の中にはあるように思えます。しかし大学卒業後内定した旅行関連会社の仕事をしながら長期の旅をする事は恐らく困難な事であり、いつまでも旅をし続けていたいという廣田先生の夢、願望が途中で途絶えてしまうこととなります。そうさせないためにも将来は働きながら、10年後には医学部に入り医学の術を身に付け、その術を活用し、あるいは奉仕して世界を巡る旅が出来るようにと考えているそうです。今回旅をテーマに廣田先生の大変デリケートな心模様迄踏み込んだお話をして頂きました。社会人になられましても益々ご活躍され、様々な旅を経験され、何かの機会に再び「平成遠友夜学校」にて講演して頂ける時が来ますことを願っております。

平成遠友夜学校生徒 高橋 備



太田 晶さん近影

2月28日・3月1日に「2014年度卒論ポスター発表会」が北大総合博物館1階「知の交流コーナー」に於いて開催され、本記事を執筆した太田 晶さんのポスターが「優秀デザイン賞」を受けました。タイトルは「モンゴル上部白亜系バヤンシレ層より産出した恐竜化石の病理学研究」でした。

4月からは、むかわ町穂別の地域おこし協力隊員として恐竜化石を活用した町作りに取り組まれるとの事です。

お知らせ

北海道大学総合博物館ボランティアの皆さま

ボランティアの会会長 在田 一則

立春も過ぎましたが、皆さまにはお元気にボランティア活動にいそしんでおられることと思います。立春は「春の気が立つ」ことに由来しているそうです。南からは梅の便りもありますが、北国では春の兆しが現れたり消えたりですね。

さて、春の訪れとともに、4月1日から、総合博物館では展示公開が全館で一時的に閉鎖されます。耐震工事のあと、展示リニューアルを行い、2016年7月1日にリニューアルオープンされる予定とのことです。

しかし、ボランティア各グループのボランティア活動は、各担当教員の指導のもとにこれまで通り行われます。この「ボランティア ニュース」の発行も続けます。

「ボランティア ニュース」は、ボランティアどうしの相互親睦や情報交換の場や学習の場であり、また博物館教職員とボランティアの相互理解の場でもあります。さらに、「ボランティア ニュース」は来館者にも配布されており、総合博物館やそこで行われているボランティア活動を市民の皆さまに紹介する役割もあります。

このような「ボランティア ニュース」の機能や役割は総合博物館の公開展示が一時的に閉鎖されている間も維持して行きたいと考えています。また、編集委員の皆さんのご努力で年4回の季刊発行が確立されている現状を維持したいということもあります。

ただ、「ボランティアニュース」の中で来館者にも好評を得ている連載「〇〇先生小伝」は一時的に閉鎖の間は休載いたします。それは、「〇〇先生小伝」は北大でかつて活躍された諸先生の業績や人柄をボランティアの皆さまに知っていただくとともに、市民の皆さまにもお知らせし、北大を理解していただくことが重要であると考えておりますが、一時的に閉鎖中の「ボランティアニュース」に「〇〇先生小伝」を掲載しても来館者の皆さまに読んでいただくことができないからです。

「木原 均先生小伝」は前号(35号)で完結しましたが、次は北方植物の権威である「館脇 操先生小伝」を農学部の五十嵐恒夫名誉教授に執筆をお願いしております。リニューアルオープン後の連載を楽しみにお待ちしております。

展示公開一時休止

総合博物館事務 成田 佳子

総合博物館では、平成26年10月より耐震改修工事を実施しています。それに伴い、改修部分に該当する収蔵庫の学術資料等の一時保管場所として、1～2階の展示室の一部を閉鎖しました。また、平成27年度からは、正面玄関や外壁の工事及び足場の設置等のため、来館者の安全を十分に確保することが難しくなることから、展示室をすべて閉鎖し、公開を休止することといたします。工事終了後は、展示リニューアルを経て平成28年7月1日より公開を再開する予定ですが、詳細につきましては、決定次第改めてお知らせします。

公開休止中に予定されている各種事業等につきましては、総合博物館ホームページ等でお知らせいたします。ご不明な点や、詳細につきましては、北海道大学理学・生命科学事務部事務課 博物館

担当(011-706-2658)へお問い合わせください。皆さまには多大なご迷惑、ご不便をおかけいたしますが、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

展示室閉鎖スケジュール

- ◆平成26年9月末より閉鎖
展示室 1階南西奥6部屋
- ◆平成26年10月中旬より閉鎖
展示室 2階南西奥1部屋
- ◆平成27年4月1日より閉鎖
展示室 1・2・3階全室

「ミュージアム・ショップ」の営業は3月25日までです。

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース 第36号

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、児玉、沼田、山岸）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2015年3月
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-4706
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>